

双塔

御復活号

1 9 6 0

新潟カトリック教会

聖句

アレルヤ アレルヤ アレルヤ
きようこの日 見よ ひとの子ら
天の王、さかえの王は
死にかりて、よみがえりたり。
アレルヤ
いとよき、この祝いにぞ
ほめうたと、よろこびをあれ
みまされらたにえむ。
アレルヤ



目次

老年について		二
主の召あれば		二
創立当時の新潟教会に起つた		五
ルルドの奇蹟		七
青年の信仰		一
ヨゼフ会便り		一三
婦人会便り		一五
学生会から		一七
疾る日の訪向から		一九
男子青年会の活動		二一
女子青年会の活動		二三
「こどものページ」		二四

谷

双

見よ

020

会経でレリイ氏器而

老牛について

兼田 耕一郎

「石激る流水の上のこゝの萌え出づる春になりけるか」(志賀重子) この歌はもう僅かに記憶してない万葉集の歌の中で私の最も愛するものの一つです。春のよろこびが実にあぐやかに歌いあげられていて、私には同じ様に「春の歌び」を歌うヨハン・シユトラウスのワルツよりも愛れている様に思われるのです。この歌を思い出すたびに、流れる様な明るい調べの中に「生の躍動」とでもいうべきものを感ぜたものでした。けれども、再び春がめぐって来てこの歌が記憶によみがえった時、その印象が全然変つて驚かされたのです。その澹然とした新鮮な流動性がある色褪せていたのです。丁度、どんな喜びに対して感動を持つことなしに常に一定の距離を置いて眺める様な、妙に淋しい弾力のないものを自分の中に意識したのです。若死をするだろうという——何の理由も振舞もないのですけれども——ほんやりした予感を持ち、その間動き続けて死を迎え様と思つてゐる私が、

こんな妙な題を選び、自分の心をみつめながら考えてみようと思ひ始めたのはそのためかも知れません

若さは「バラ色の可能性」であると或人が定義をされました。なかなかうまいことを言つたものだと思います。青春の持つ明るさと輝かしさは「無限の可能性をはらんた未来の観念は未来そのものよりも豊饒である」(ベルグソン)ということはあるとしても、確かに可能性の豊かさに基くといえるでしょう。この考えを裏返しにすれば、老牛とは可能性の貧しさ、つまり狭隘化ということになります。全然実現の見込のないものを人は望みも期待もしませんから、可能性は期待可能なものについていわれる言葉です。ですから人生は期待可能なものを徐々に失つて行く過程であるといえるでしょう。人は存在という最後のものを失つてその人生の幕を閉じるのです。けれども、これは私達の意識の中ではもつと積極的に種々の限界、制限として意識されるのだと思います。こうした限界を單に認識するのみでなく、不可抗的なものであると悟つた時から老牛が始まるのだと思うのです。ですから、老牛とは何才以上という風に劃一的に定めることの出来ないものだと

私には思われるのです。

自分に老人くさいところが出て来たのかと思うと、ひとりですくすく笑いたくなつてしまします。私はまだ老境というものに憧れを感じたことはないし、むしろギリシヤ人達の様に若さと美に心を惹かれます。その理由はおそらくこうだと思ひます。この冬にひどい風邪にとりつかれた私は、必要な僅かのことをする外出来るだけ安静にしていなければなりません。外へ出歩くことは勿論のこと、本を読み始めてもすぐに疲れてしまうという有様で、長い間、いやというほど制限を味わわねばなりません。いろいろ焦つて桑を試してみてもはかしくなく、春の暖かさがやつて来るまで待たねばならないと心を決めた時、つまり若さの条件に対する一つの制限を單に意識するのみではなく、超え難い所与として受入れた時、私の心の中に老牛に対する理解の小さな窓が開いたのだと思うのです。

老牛が本人にとつて、又人々にとつてみじめさとして把握されるのは何故でしょうか。いろいろな特殊の事情を別にすれば「老牛の悲劇は、か」が老いている

というところにはなく、まだ若いと思うところにあるというサスカ・ワイルドの言葉の中に鍵がひそんでいる様に思われます。若さの中に価値の基準を置く時、人は老牛を拒否し忌避しなければなりません。けれども森羅万象がその生命力を徐々に枯渇して、衰え減り行くのは自然であつて少しの不思議もありません。永遠に若くあり度いという願ひは詩的ではあつても出来ない相談です。自然は変化を逃れることが出来ないからです。ですから、自分はまるで老衰などとは関係のないものの様に永遠の若さを讃美するロマンチズムには讃成するわけにはいかないのです。老境という言葉はその語感から私の最も嫌いな言葉の一つです。老境は普通考える様な外的なものではなく、拒否出来ないものを拒否しようとするあがきの中に表れる態度の醜さなのではないでしょうか。いろいろな手段で覆いかくそうとする人々の中にかえつてまがまがと老いのみじめさを見せつけられる様に思うのです。そしておそらく、それはその人がみじめなものと感じているものの投影なのだろうと思うのです。

よくあることですが、自分の生きて来た人生が、多くの真実を含むには違ひないとしても、唯一つのもの

であると思ひこむ時には悲劇が始まります。この様な人が権力を持てば独裁者になり、そうでない場合には人々から閉め出され、うるさがるか、馬鹿にされるのが閑の山だからです。こうした人々は長い人生経験から本来より開かれていなければならぬはずの視野を自分の味った挫折や、或は逆に自信に満ちた過信や自我の硬化によつて狭めてしまい、個性的なものと普遍的なものとの差別を見失つてしまふからだと思うのです。確かに若さは良いものです。けれども老年にはそれに相応しい生き方があるのであつて、私達は単に可能性を失うばかりではなく、新しい可能性を開花せしめなければならぬのです。可能性は現実化されなければ無に等しいものだからです。動物にとつて走衰はこの上もない悪でしょう。何故なら彼等の衰えは彼等にとつて存在理由の稀薄化を意味するからです。然し人間は猿ではありません。ですから、老年にとつて最大のみじめさは内面的な、精神的な新しい可能性の窓を開くことなしに走いを速える状態だといわねばなりません。その時、この様な人にとつて世界も自分も我慢のならないものになつてしまふにちがひありません。或は全く逆に虫が繭を作つてその中にひそむ様に自己

の小さな世界に安住してしまふでしょう。徒然草の看者をして「いのちなげければ恥おほし。ながくとも四十にならぬほどにて死なむこそ、めやすかるべけれ」といわしめる理由は、「ひたすら世をむさぼる心のみ深く、物のあわれも知らずなりゆくなむあさまし」と續いていう様に内面性の欠如にあると思われるのです。そして真の単純さは無智や人間構造の幼稚さとは異なるものです。それは多くを知り、その中から純粋なもの、価値あるものにまなごしを注ぎつつ生くる深い豊かな心の態度をいうのだと思います。

けれども、今まで述べて来たことを、ここでくつがえすか、或は新しい意味を与えなければなりません。何故なら恩寵がこの世界に入つた時から、すべては新たになつたからです。靈魂の生命は無限に成長する可能性を持ち、私達が自ら放棄してしまふ限り、肉体的生命の様に衰弱と死に決定づけられてはいないので、魂をしの殺すものは結局キエルケゴールが「死に至る病」と呼ぶ絶望なのだと思います。然し肉身のみがえりを含む永生の歓喜への「絶対的信仰」(マルセル)を有する人は、絶望を拒否することによつて、

自然的限界を超えてしまふのです。信仰を持つていても老年は避け得ないでしょう。けれども、もはや怖れためらう必要はないのです。何故なら、信仰に生きる人々は、人生の長い、そして数々の痛ましい体験を通じて、あらゆる自然の可能性を無限に超えた完全な状態に到達するという一つのみごとな新しい可能性を創り出したからなのです。

フランシス・ジャムは私の最も愛する詩人です。彼は「死の日は美しく、清らかであるための祈り」という詩の中で次の様に祈つています。

私の死ぬ日が美しく清らかであるようにして下さい、大きな平安がありますように、

美しい清らかな日にして下さい。その日には、私が平和の詩人として、私の床のまわりに素晴らしい子供たちを、黒い目をした息子と紺碧の眼をした娘とを見たいのです。

彼らが、決めたために、自分の父を見詰めに承ますように。

そして私の顔の厳しさが、彼らを大きな甘美な神祕で顧みさせませんように。

私の死は、その神祕の中で、恩寵のように彼らに現われるでしょう。……

この単純な美しい祈りの中に、私は死でさえ恩寵である様な、真に豊かな運命の老年を送つたものの姿をうかがうことが出来る様に思ふのです。そして聞きなれた聖アウグスチヌスの「人は神に赴くまで安んずを得ず」という言葉が、実におそろしいほどの現実性をもつて迫るのを覚えるのです。

(おわり)

主の口あれば

ロベルト M. A. 三崎 良次

聖なる召令の歓喜に胸をおどらせながら、東京は麹町四谷 有名なNTVのテレビ塔、番町小学校近く四番建の神学校の門をくぐつてから、もう一年の月日が流れようとしている。昭和三十四年四月十日、私の生涯の最も記念すべきあの感激の日は、また全国民こやつて御祝ひした皇太子殿下御成婚の佳日でもあつた。四谷の街道で暖かい春の陽光を浴びて、額の汗を拭きつ

つ皇太子御大事を奉迎したのはいつの日のように思われる。四年間ではあるが驚愕した背広を脱いで、再び黒色の学生服を着たとさ、何かしら複雑な表現しがたい気持ちにかられたのは、私一人だけではあるまい。

神学生生活、それは召命を感じてから、苦悩と焦燥の熱感を至て初めて味う苦味な、文字通り意味深い生活体験であつた。あまり予備知識を持っていなかつた新参者には、最初はすべてが「主よ然り」と云う肯定の連続であつた。

慣れぬ身振りで上級生を見習い、ベルで部屋や廊下を右往左往して笑われたり、「落ちついていますね。」とお世辞を云われて返答に窮して赤面したり全く敵々の態であつた。月一回のモニタの時間に、鏡面で御聖体拝領してはならないと注意されてから、毎朝洗面所で、互に顔を見合せながら「まだ剃らなくともよいから」と尋ね合う光景は微笑ましいものであつた。休憩時間にはそれこそ走いも若きもボールに戯れたり、雑談に破顔大笑したり深刻な表情になつたりして、いつの童心に帰っている自分に驚いたりもした。こう云つた新神学生の中に、法学博士あり、三十代の曾て高校教師あり、アメリカ帰りの留学生あり、経済学士、法学士

高校卒業生が何の隅にもなく和気あいあいと楽しく生活しているのである。しかし彼等には、人知れぬ苦悶や悲しみの面のすみ出るような過去が隠されているのである。主の召命にすべてをさけうってやつて来た場面の若人の前途にも苦しい夜の道が横たわっている。その一つは、あのアルスの聖司祭ガイマンネを頼り、悔ましたラテン語である。頭が固くなり、記憶力の減退を自覚している我々を更に打ちのめすのは週一回の試験である。「こんな苦ではなかつたのだが。」と採点済の答案に見入つて泣きそうになつたり、実りなき苦闘の悲哀をかこち、共に慰め合う光景は年寄り部屋（特に大学卒業者のみを収容したラテン科一、二年の大部屋）ならではあまり見かけられないものである。そんな時に、「天主様があなたに与え給うた召令に信頼しなさい。」と激励して下さる霊的指導司祭の言葉は、何と云う深い慰めと希望と勇気とを与えてくれることか。試験後悲痛な面持で神学校に帰り、聖堂脇の聖母マリヤ様の御像の前で一心に祈つてゐる姿は、本当に痛ましい。

このような喜びと苦しみの日々は、様々な試練を送り込むと同時に、恵みの深い神の豊かな生命に与る内

創立当時の新潟教会に 起つたルルドの奇跡

― 声誌四月号より転載 ―

的幸福をしみじみと味わせてくれる。御聖体の前に感謝で目がいしらが熱くなり、こつそり手をあてる。黙想後の何とも云えないひめやかな喜び。聖人伝を聞いた後の切なる祈願。祈禱後の甘美な喜びと慰め、それとは反対に、すこみや激しい誘惑の嵐、怠惰と倦怠感、これらに脅かされ、苦しめられ、顔え戦く。「主よ救み給え、主よ救け給え。」と祈る弱く儚い霊魂である。こうした絶え向ない霊戦に疲弊し、喘ぎながら険しい完徳の道を一步一步歩んで行く。かくしてベルで明け暮れる神学生活の日々は、永遠の時間の中に解消して行く。

共同生活に統一と秩序をもたらすベルとベルとの緊張関係にあつて、私の心の殿堂には「主の召あれば」（今田健美 作詩 作曲）のメロデーが、その時々喜びと苦しみと希望と信望の心情を盛りこみながら、或る時は高らかに、ある時は低く奏でられる。そしてこの確信に貫かれたモーターが何時かすべてを潮の如く押流し、横溢する最高潮の歓喜のフィナーレに導く日を鶴首しながら、今日また神の御前に頷ぐのである。

主よ、聖旨の成就せられんことを。アーメン

私の父は、明治十二年の四月四日、母と共に創立間もない新潟の教会で、エ・ア・ツルペン師から洗礼を受けた。父が受洗を決意するようになったのは、ルルドに聖母が御出現になられたことが動機となつたもので、それは奇跡のような不思議なことによるものである。

私の家は、遠い戦国時代、三河国から戦いを嫌つて新潟に逃れ住み、侍をやめて商人となり、屋号と山嘉と称していた。そんなところから、商人でありながら青山の姓を名のり、屋号は青山の山と、嘉七という名の嘉をとつて、山嘉という屋号としたものである。

ところが私の家には、父の代まで何代か続いて、男の子が一人しかなく、そのために青山を名のる親族が一家を無かつた。

私の祖父は商人でありながら、学問好きで餘り少しは書き、宗教心の篤い人であつたといふことで、キリ

スト叔のなかつた時代のことであるから、宗教を信じて、宗教なりの悟りを得ていた。それで死ぬるときも自ら死後束を身に掛けさせ、座席に入る姿勢にさせて貰つて、死んだというような人であつた。

父はそういう、祖父の血を受け継いだものか、頑固なまでに、正直一徹な、信心の篤い人であつた。

新潟は下田、函館に次いで開港せられた港であるから、早く外人の入つた土地で、教会も横浜、長崎、函館のつぎに出来、(明治四年)宣教師が住むようになつて来た。けれどもそれは、カトリックの宣教師だけではなく、新教の宣教師も、入つて来たのである。

御維新の改革で先祖代々の家業は次第に衰え、父は山から廻り出される。その頃いわずみと呼ばれていた石炭を商い、また牧場を経営して、牛乳を売つたりしていた。けれどもそれは、一般日本人向きではなく、居留外人相手の商売で、そんな関係から、新教の牧師と知り合いとなり、牧師は布教の目的でしばしば父たちを招待して教への話を聞かせ、母も信者になる前は父と一緒に英国人牧師の招きを受けて、慣れない洋食の接待を受けたそうである。けれども一徹な父は、自分に納得のいかないことは、決して信ずることをしな

かつたので、何事も父に信頼しきつていた母は、父の信じない教えに心を引かれることはなかつた。

商売の関係から、カトリック教会にも出入りして神父様とのお近づきとなり、いろいろな話を聞いていた。けれども頑固な父は、神父様の話も容易に受け入れることが出来ないで、よく神父様と議論を戦わしていた。その中で後年、私が麻布の教会にいたツルペン神父様をお訪ねしたとき、神父様は当時を述懐して

「お前のお父さんは、頑固だったよ、私のところに来て、何時も議論ばかりしていた」

と言つておられた。そんな風に、教会に行つては、議論を戦わせたがら、何か神父様の徳に引きつけられて、度々教会を訪ねていた。

或る時、何時ものように教会に神父様を訪ねて行つた。それは午後の二時頃であつて、玄關に案内を求めると、何時もは見かけたことのない少年が出てきて、「神父様は散歩に出て、お留守だけど、別の方が居るからお入りなさい」

と言つて、室に案内された。その少年は年の頃十三才と見られる、色白の美少年であつた。

室に入ると、まだ一度も見たことのない、白髪の老

人が居て、やさしく父を迎えたのである。当時ツルペン師は、日本に来て六カ月位にしかなつていなかったものであつて、深淵とした青年司祭であつた。だからこそ、声の大きい父の相手に、議論を戦わせたのであろう。それにツルペン師は、日本語がまだ充分でなく、父を説得するほど、よく話すことが出来なかつた。

ところがその老人は、気品の高い、何となく引きつけられるような温顔に、外人とは思われない日本語でいろいろな話をきかせた。言葉がよく解つたためであつて、父はその老人の話に議論もせず、ただ耳を傾けて聞いた。殊に父を最も、感嘆させたのは、その時から二十年前、フランスのルルドで、聖母がベルナデッタに、御出現なされた時の話であつた。それは全く耳新しい、始めて聞く驚くべき事実である。大きな驚きをもつて聞いた父は、更に帰りにその老人が「貴方に見せるものがある」

と言つて案内した室には、キリストの十字架につけられた、生々しいお姿があつたのである。それは、金や水で彫られた像ではない今喋けられて死んだばかりの、見るも惨ましい主のお姿である。あるはずがない

と思うけれども、現実には眼の前にそれがあるのを見て、父を顫倒するばかりの驚きを感じた。そうして、これほどの苦難を受けて、人を救う道を開かれたということに、大きな感動を受けて家に帰つたのである。

大きな驚きと、感激をもつて帰つた父は、勿論母にすぐそのことを、話して聞かせ、感激に昂奮して、そのときのことを、いろいろなと、繰り返して、考え続けて、夜になつても眠れなかつた。翌朝になつて考えても、不思議でたまらない。用事を済ませるとすぐ、また教会に行つた。

朝早く訪ねた父を、ツルペン師はいぶかつて迎えたのであるが、父は師の顔を見るなりすぐと

「昨日の人はどうしました」

と聞いたのであるが、神父様には、何のことかさっぱりわからない。よく尋ねてみると自分が散歩に出た留守にきて会い、いろいろの話を聞いたというのである。神父様はそれを聞くと、からからと笑つて

「何んだ、あなたは夢を見たのだろう」

という、父は真顔で

「とんでもない、夢ではありませんよ、貴方はたしかにお留守でした、けれども可愛い男の児が出てきて、

貴方は留守だけれども、別の人が居るから入りなさい、
 といって案内してくれたのです」

という、けれども教会には、そんな子供もないし、
 また当時日本に來ている司祭は、パリイ・ミツシヨンの
 会の若い司祭ばかりで、そんな老人は一人も居ない。
 神父様は、父が夢を見たと思うよりほかに考えられな
 い。けれども父が、あまりに真剣にいうので、
 「それなら、どんな話を聞いたのです」

と尋ねると、父は大きな感動をもつて聞いたのであ
 るから、心に深く銘じて少しも忘れてはいないから、
 其の時のことを、ありのまま詳しく話したのであつた。
 殊にツルペン師の驚いたことは、ルルドに聖母が出現
 せられたときのことを、父が詳しく知つていたことで
 あつて、私がツルペン師をお訪ねしたとき、そのこと
 を話して

「あの時、お父つあんは、私よりもつとよく話した。
 私はお前のお父つあんが話したほど詳しく話すことは
 できなかった」

と言われた。御出現のことは、その頃、まだ日本に
 は紹介されていなかったのであつて、日本人にとつて
 は、全く未知のことであつたところが父は、詳しく、

しかも正確に知つていて話したのであるから、事実を
 認めざるを得ない。それには父は、今までは、人が
 変つたように、謙遜になつて、物腰も丁寧であつて、
 心に何か大きな変動のあつたということが、その態度
 によつて認められた。

そのことあつて後、父は今までのように、議論する
 こともなく、母を伴つて、一告に教えを受けるように
 なつた。教えを学んだ父は明治十二年四月四日、ツル
 ペン師の霊名を頂いて、オグスチノ青山嘉七となり、
 母はマリア青山照子となつたのであつた。その時ツル
 ペン師は日本に來て、始めて洗礼を授けたのであつて
 「オグスチノとマリアは、私の長男と長女だ。だから
 その子供のお前は私の孫だよ」

といつて私を可愛がつてくれた。師はその時のこと
 を回想して

「私は奇跡だと思ふが、そういうことは、司祭として
 堅く言うことはできない。けれども奇跡らしいこ
 とであつた、ということは確かに言える。天主様が、
 お父つあんを導くために、そういう不思議なことを行
 われたのだろう。頑固でよく議論をしたけれど、正直
 な真直な人であつたから、天主様は特別な方法で、信

青年の信仰

フランシスコ・ザベリオ

A・H

仰に導かれたのだろう。あの時の子供は、わからない
 が、老人はマリア様のことをよく、お話しになつたこ
 とから考えて、聖ヨゼフではないかと思う」
 と言つていた。私も両親も、当時のことを思い起し
 て、ヨゼフ様だろうと言つて、聖ヨゼフ様を特別に尊
 敬していた。

P 神父様 御復活祭おめでとうございます。毎年こ
 の春の暖かな希望に燃える季節に大祝日がいります
 ので殊更に胸のふくらむ思いが致します。

早いもので神父様の元から私が巣立つて、もう五ヶ
 年も過ぎ更にあの受洗の感激の日から八年近くになり
 ます。色々と言ひ信仰生活の壁に当つて神父様には
 大変心配やう御迷惑をおかけして附つていたござまし
 た。実社会に出た当時左程重大にも思つてみなかった
 背信や世間の矛盾に直面して私自身の弱さに今更なが

ら驚いたり時々祈りを忘れることがあつて、そんな時
 にP神父様と膝を交えてお話出来た時間が懐しく思い
 出されています。それでもこの頃ようやく私の様な青
 年の信仰が、からし種の蒔かれる場所によつて、どん
 なに強く影響されるかわかる様な気持ちになつてまいり
 ました。今御復活のこのよろこびの中にさえ勤めの同
 僚の人や親しい人から「君は本当にキリストの復活を
 信じて生きているのか」と向われて聖パウロの様な強
 い信仰の言葉で返答する事が出来ないで心で躊躇する
 ような勇気のない自分を感じている有様なのです。そ
 れというのも私達の置かれてある社会の中ではあまり
 にも合理的に又、理論的に事を運ばねばならぬ環境に
 あるせいかと思つています。その実その根底にあるも
 のは実は人の和であり、愛そのもののしか解決出来ない
 場合が多いのですが、一見しては、やはり世間で言う
 理論的であるという傳体の知れない曖昧な言葉に支配
 されている状態なのです。そして私の五年の経験は神
 父様や他の学生達とあんなに一生懸命、勇気あつて正
 しいと信じて行つて来た時に比べて今、どんなに愚病
 になり引込み思案になつてしまつたか私自身でその原
 因がわからぬまゝに過ぎてしまつております。

P 神父様、前によく言われましたね、「もつとよく本を読んで、もつと理解して、よく考えて自身をつけて信仰生活に入るなどというのは既に巧妙な悪魔の誘惑に負けている証拠ですよ」と。確かに悪魔は私達の心に非常に入り易くなつてきた様に思われます。その上かつて先輩のKさんも「良心的であること、神経質であること、は断じて違うことだし、罪を痛悔すること、思い煩うこと」とは違うことだ、私達にとつてどんなに困った事に突き当たつてもいらいした思い煩つたりすること自体一つの罪だと思ふ、「心戦」にもあるように、これは「傲慢」である事に他ならない。」と。

青年信者の信仰が一人々々の生活の中で身近かな事柄の解答をせめられる時、神に心まかせる心から次第に遠ざかる時、その時はキリストの神秘体の統一の外に私達自身が、はみ出ているのではないかと思つています。

稍々もするとこの様に、竹りから遠い合理主義的な物の考え方に墮ちることは私達信者、青年にとつては神に対して主知主義的になる恐れも多分にあり、時々不安に感じているのです。どんな場合でも謙遜であ

り神には敬虔であることが大切であることは思つてはありますが、といつて非カトリックの社会の中で妥協して生活を甘んじていつてはならないと思ひ、どんな些細なことについても、カトリック的である様、努力しなければと考えています。労働組合等の問題にしても身近かな事を解決する事がむしろ背面にある平和、自由ひいてはもつと大きなイデオロギーの問題まで考えを及ぼし自分で自分が身動きの出来ない状態になつて来ているのです。仕事の合間、合間に聞かれ語られる平和という言葉や幸せという考えが個人々々によつてあまりにも違いがあり驚いています。日本の様にカトリック的な物の考えが本當に生活の中に生きて一つの表現される行動としてあらわれていない今日では一人一人のカトリック者自身もやゝもするとこれら偏つた、かえつて平和という美名の大きな渦の中に巻き込まれて、それが本當のもの、ようになって来てしまふ恐れがあるのです。その意味ではもつと現実の社会の中でも、前進しなければと、思い決心致しております。

P 神父様、この様に社会に出て初めて学生の生活と異つた激しい環境の中で私自身が曖昧な態度のとれないことが分りました。

社会で特に恥場の中でカトリック的であることは非常に勇気の必要な事です。これは信仰生活に結びつくことです。

その反面、私には一つの希望も見出してあります。それはこのような社会の中の多くの青年にも希望を併せ持つてゐるからです。幸いにも私のまわりに終局に於ては同じような善意を持つ人達が多く居るからです。

この青年達の善意には確かに宗教的なものはともなつてはいません。しかし彼等には信するものを持たない代りに生まれながらの善を有しているとみられます。

その人達に希望を持つてゐるのです。私はこの様な善意の人達の救世の爲、又私自身の完徳に至るためにも私の置かれた今の立場の中でどんな小さな事にでも、しつかり忠実にやりとげたいと思つております。それと同時に眞の平和や神の限りなき愛、永遠の生命について懇想し同じ年代の青年と一結に絶てが神の御栄の地上に来らん様祈りたいと思ひ更にこの御復活のよるこびの様な心からの聖なる平和が身近かな人達に大きくひろまる様努力致したいと思ひます。

P 神父様、これからより多くの絶え間ないお祈りをお願ひ致します。之れは同じ兄弟である青年信者及

が多くの求道者ひいては迷いの中に何か本當のものを求めようとしている善意の青年達のために非常に必要であることを信じてゐるからです。

最後に神父様方の御健康をお祈り致しつつ筆を置きます。

ヨゼフ会便り

(S 生)

歳月の過ぎ去るのはまことに早いもので、去年の御復活祭に一本五円也の串ごんにやくを頂いてからもう一年、またこの十九日に一九六〇年の御復活祭を迎えることになりました。しかし歳月の流れといつても人によつて各々その感じ方が違ふようにも見受けられ、或る人は短かつたと、或る人は長かつたなあと感想を洩らしてくれまふ。私自身はどうかと時々反省もさせられますが、それは過去に於て充実した生活、特に自分が一生懸命に働いて来た時などは長かつたと感じうのかと怠惰にすごして来た時などは、想ひ出す事印象深い事なども少なく、早くも一年を暮して了つた

のかと、自分ながら驚きあきれたりもするようです。

私達の信仰生活、カトリック者としての生活にも何かあてはまりそうです。毎年御降誕節と御復活節を通じて生活して行く過程は同じで、信仰心や日常生活の内容の前進と後退の程度によつて、各々が過去をふり返つて見た時の感じ方が違つて来るのではないでしようか。

昨年ヨゼフ会の歩みはどうだったでしょうか。残念なら中だるみの経過を辿つた事を報告しなければならぬようです。

あの頃、G・S氏が幹事をやられてからの一、二年、兎に角新鮮味が溢れていたことが懐かしく想い出されて来るのです。

もつとも去年は我が国の経済力が更に大きく飛躍した時、日本國中がみんな忙がしかつた時で会員の人達もお互が公私多忙を極めたのでしようか。教会での集りなどに足並が揃わなかつたのも向々あつたようです。

しかし、お互が本当に忙がしくて仕様もない程の時

に文字通りの寸暇をさいても共通の真理の場に、相集い相語り合う喜びの方がどんなにか好ましく、効果的であらうにと心反省している次第です。

本年のヨゼフ会幹事は、新進気鋭のS氏との氏、御二人のヨゼフ会中興の恒例とも目される御活躍を期待している次第です。

勿論、せつ気など業にしたくともありません。卓上には粗末な酒肴が一、二品。そして盃にほんの二、三杯でみんないころころと上気嫌なのです。お互がお互の心を信じ切つて、如何にも楽しそうに語り合つて居るのです。貧しくも愛すべき大人達。これは、ヨゼフ会の新年会と聖ヨゼフ祝賀会での小さな風景の描写です。

昨年から本年にかけてのヨゼフ会の人車買動は左の通りです。

新会員

T・O・I

の三氏が青年会から新入、

このうちO氏は五月にドイツ留学二年間、K氏は受洗で、K氏は仙台教会から転入。

転出

K

氏が沼田教会に転出

その他

K

氏が一年間東京に出向

汝等が我を選みたるにあらず、我こそ汝等を選びて立てたるなれ(ヨハネ十五、十六)

以上

婦人会便り



主の御復活を心からお祝い申し上げます。

私共はそれぐの立場で希望をもつて四旬節を過してまいつた事をおいそれ文に今日迎える復活の喜びは一しほ深いものである事を覚えます。やがて私共にも此の世の旅路の終る日が何時かはまいります。その日までお互に常に希望をもつて祈り助け合つて日々主の愛を求め、くてもやまないものであり度いと切望する次第で御座います。

さて、婦人会便りは最近新しく婦人会に入会された方々の為と又都合で例会に出席出来なかつた方々の為

にとおもひまして、過去一年の歩みを簡単に御報告申し上げて、婦人会の紹介にかえさせて戴きます。

一、当教会の婦人会は原則と致しましては当教会の信者の婦人の集りで御座います。現在は既婚、未婚、年令等に余りとりわれないで、本人の自由意志で入会されて居られる状態です。研究者の方でも希望出席される事は一向に差支御座いません。

二、婦人会は教会暦に準じまして当教会の年中行事(主に、復活祭、聖母被昇天、クリスマス)の折の催し出来る文参加協力して居ります。之は又お互の親睦又信者全体の融和につながる事でも御座います。

三、毎月一回、四週の主日、九時の御ミサ後、信者会館で例会を持つて居ります。

聖書のお話(聖パウロの書簡)

三森主任神父様

霊的向上のよすがとして居ります

(その都度掲示板に掲示いたします)

その他昨年の値を参考迄に申し上げます。

一、戦後の学校教育と子供の養について(六月二十八日)

(市内東山の下小学校)

二、子供の宗教教育について

三森神父様

三、母と子供の集い (九月二十七日)

三森神父様のお話

録田神父様(具の他)の人形芝居

婦人会員の談話

四、会費は月二十円、教会維持費の中に入れて納入して載いております(婦人会費の役が出来ております)参考までに昨年度の便達を申し上げます。

夏期学校の生徒へのお菓子代

司祭叙品(中田神父様)のお祝の二部

伊勢湾台風の見舞金NHKを通じて

母と子の集りの茶菓代

クリスマスのお祝—教会等

右詳細の数字は会計報告でおしらせ致しております。

五、委員は選挙で人名選出され、教会と会員相互の連絡に当たっております。

三森神父様から毎月例会で御指導いただきました聖パウロの書簡は今年で五年目を迎えました。この書簡を通して私共は、信仰の確信、キリスト教の愛の精神

真の自由と平和の意義、人間の弱さ、信仰と生活等派山の心の糧についてそれ／＼学び導いていただいた事を感謝して居ります。改宗者パウロのはげしいとおむわれる程の信仰が迫力をもつて私共に通つてくるのですが、微温的信仰の私等には最初圧倒されるおむいで近づけない様な気持ちにさえなりましたが、面を教え、年を重ねてまいる毎にそれらの精神がまことにったなくそして遅々とした者ではありましたが、気づかぬ程に自分の心の支になつていく事にふと気づかされる時、ひそかに願ふひたむきな心に与えられる主の計り深い憐みに幾度か深い喜びに心を低くした事で御座いました。目に見える集りは誠にひそやかと申してよい程少人数(十名余り)の場合が多くありましたが積み重ねて来た月日は決して無駄ではなく、むしろ大きな恵みの積み重なったものであった様に覺えます。

最近の文化的進歩の目覚しきは、かつて平穩であった私達の家庭の中にもどん／＼這入り込んで異様な感さえ覺えるのが現状の様にもわれます。そうした中にあつて私達の信仰を四囲の中に生かして行くためには色々な困難な問題に直面して行かねばならないと思ひます。も早昔私共が学んだ教理問答、戒律の記憶文

に甘んじている事はとて不都合だといふ事を痛感させられますと同時にお互に与えられている機会を活かして各人の時代、環境、それ／＼の力に就いて生活の中に神への信仰と愛を實踐して行くことに深い意義を覺える時であると思ひます。ピオ十二世は御自作「聖家族の祈り」の中に「キリスト教家庭」の大切を使命を私達に明示してお出になります。私達は先づ第一に

神への信仰と愛を家庭の中で實踐するよき妻でありよき母であり、よき婦人であり度いと願ひ少しづつでこの理想が實現されます様に身近に与えられて居る機会を活かす為にお互に心を盡しなげみ度いと存じます。

学生会から

現在学生会の構成人員は、大だい十五名位であり男女約九対六の割合である。しかし、毎土曜日の研究会には出席が非常にまち／＼で七八名出席すれば良い

方である。又、實際研究会以外の活動といつて特別目立つものをお感じにならないだろう。クリスマス劇とか、お聖堂掃除くらいのものでから、確かに正直に云つて現在の学生会の在り方、活動状況は満足すべきものではない。いくつかの理由があると思われるが、大学、高校生を対象としている為、大学生と高校生学年との間には見えぬ隔り、又、大学入試の為あるいは就職準備の為には高校上級生の欠席、又、会員相互の連絡の不徹底等々、特にその受験期に於ける中堅層の欠席の爲、相当大きな穴があく様に思われる。教理の勉強も無聊重要極まるものだが、實際問題として最も身近な試験とか学業の方がやはり学生にとつてはより切実な問題としてとられていくのではないかと考へる。よりよい信者、社会人となる為の前段階としての学業と聞けば今の所学業を重視するのはやむを得ぬ事かも知れない。又、個々に有能な人物が居ても、それを盛りたて難とするだけの意欲が一般部員に欠けている事、各会合とか集団に於ては中心人物が一人で隔つていて会の発展は見られない。やはり各会員の積極的な協力が重要な事と考へ、自分をも含めて各会員に事を大にして希望する次第である。これから大学

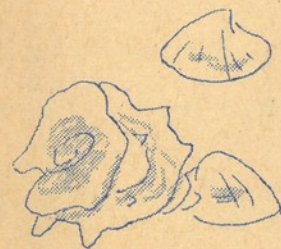
高校共通な研究課題を設け、高を越えて行きたいと思う。

大抵の生涯の活動は土曜日の研究会を中心に行ってきた。鎌田神父様を中心にして典礼、玄義、自然科学とカトリックなどというテーマの勉強をしてきた。クリスマスには聖劇を行ったり、学連全国大会に参加こそしなかったがそのテーマの研究をしたり、去々年の休みには聖人の伝記の研究発表などを行つた。貧弱ではあるが活動をしている事は御理解いただけると思う。これからの方向を考えるに、少しでもカトリックの教えを身につけたものにし、又学生という時期独特の情熱で学科の勉強と共に教理の勉強を通して、広い視野を通して世界を、人を見る為、努力したいと思つてゐる。最近も鎌田神父様と本年度のテーマを話し合い、いくつかの研究題目を提起した。それを中心に土曜日の研究会を主体とし大祝日の行事に参加したり、待者の訓練、お聖堂の清掃、それから全国大会参加、又、会員間の親睦を計る為、レクリエーションも随時挿入したいと思つてゐる。

三月二十三日には東京学連の人が二名こられて種々の向題について話し合ったが、やはり各会員の努力と

連絡の徹底という事を痛感させられた。そして中央の学連の活動状況の記されている機関紙月報の講義など中央との接触の多い地方学連にとっては重要な事だと思つた。

学生だけで、ある一つのまとまつた方向をもつて勉強し活動していくという事は幾かしい事かも知れないが、臆病になつたり、引込思案であつたりしてはならない。出来る限りの努力が大切な事ではないか、結果を云々するよりも過程を導びたい。幸いよき理解者たる御熱心な指導者の鎌田神父様、先輩たち、皆我々が疑問を持った時、信仰のつまづきが生じそうになつた時、率直にひびきをつき合せて話合える状態にあるのだから、そういう事を考えて、これからの活動を更に有意義なものにし、精神面の充実を計ろうではないか。



或る日の訪問から

聖ヴィンセンチオ・ア・ポウロ会

「あのね Sさん、わたくしはお祈りがよくおほえられないのですが、願が悪いばかりではなくて、信仰が足りないのでしょうか、うちのみんなにそう云はれるんですよ、ほんとうに天主様に申訳ない気がします」

「さあね、私もお祈りは満足におほえていませんよ、あなたにそう云はれると私も全く恥かしいですね」

「主禱文、天使祝詞や衆唱、食前の祈りの様な短いものならよいのですが、少し長いものになると駄目なんです、それからわたくしは、身体が悪いもんです、祈り書を持つてゐることも容易でないですよ、それだからなお、お祈りはおぼえてしまいたいですよ」

「全くお恥かしいですね、私なんか、たまに出張して祈り書なしでお祈りをしようと思つてお祈りを始めますが、途中でつかえると次のお祈りの言葉が出てこないことがありますよ、毎日家でやつてゐる時は祈り書を見てやつてゐるからです、仕様がないからもう一度始めからやり直すんですよ、そうすると、

スラスラとお祈りが出来るようになりますね」

「わたくし、全く困つてしましますね」

「でもね、こんなことを聞いたことがありますよ、天主様に捧げるお祈りなんだから、天主様に對する気持ちがこもつてゐることが一番大事だ、だから祈り書になくともその時の自分の気持ちを捧げる、或は天主様とお話するつもりで、自分で作つたお祈りをするということも大変よいことですね、あなたの場合と必ずしも祈り書によらないでもあなたの感謝や痛悔の気持ちを天主様に「するつもりで作つたお祈りと、主禱文、天使祝詞、衆唱をお捧げすることがよいのではないですか」

「この前妹が洗礼を受けてから始めて告解したんです、つて、そうしたら何だか涙が出て出て仕様がなくなつたと云つてました」

「そうですね、私も覚えていますが、始めての告解というものは感激が大きいですね」

「みんなで自分の経験等を話し合い、自分達の信仰が常にみずみずしくありたいものだということに話合はすむ」

「わたくしのところは、病人が多いので、神父様が

来て下さって、自分で告解しようと思うことを紙に書いて神父様にあげて、告解するんですよ。でもね、毎度同じ様なことばかり書いて何か恥かしい様です」

「それは何と恥かしいことではないんです。ようか、例えば他人が自分を見た場合にあの人はあんなだ、とか、こうだとか自分の欠点（罪）を見ていますね、しかし自分は気付かないことがあるし、又自分自身なりに、私はこういうところが悪いから（罪源の傾き等）直そうと思つて氣をつけていますね。すると究明するときはそういう点に特別注意しますね。だから同じような告解になることあるし、又そうは簡単に直らないのではないですか、大体神父様に告解するんでなくて天様に告解してお許しをいただくんですから大丈夫ですよ、オヤオヤ大分わかつた様なことを云つたが、私も本当はあなたと同じなんですよ」（みんなで大笑い）

「それから皆さん、こんな経験はありませんか、告解部屋へ入る前に究明の結果をどうお話ししたら一番よくわかつて貰えるだろうかと考えて告解部屋へ入りますね。ところが告解を終つてすつかり軽い気持ちになつて出て来て感謝のお祈りをしている時に、アーこう

こうお話しすればよかったとか、この点はもう一歩突進んで究明すればこういうところにも原因があつたのだと云う様なことに気付くことがありますね、黙想会を指導して下さった今田神父様がおつしやつたことですが、それは究明の時に自分で自分をにらみつけてあらさがしする様な気持ちですものだと云うんですね、だからつい告解が重荷になるんだ、天主様はみんな知つておいでになるのだから天主様のお助けを願つて、すべてをさらけ出して自分の罪を自覚させてもらつてお許しを願うんだという気持ちで究明し告解なさい、そうすれば告解は重荷でもなく、もつと立派に出来るようになるでしょう、とね、だが、なかなかむづかしいことですね」

「そうですね、告解の時になるとつまらないことなんかばかり考えていて、……」（告解のことについて話がつづく）

或る日の訪問の一部です。病気で十何年も寝て居られる家の方々です。肉体的にも経済的にも十字架を背負つて歩いて来られた方々です。信仰を得て十字架を背負つて、明るく生活して居られる方々なのです。

SとKの二人の会員は、変いお話しが出来て自分たちのために、又訪問してあげた方々のお役に立つたことに喜びを感じ、聖母マリヤ様と聖ヴィンセンチオの御保護に、改めて感謝を捧げながら、右と左にわかれてきました。

私たちのこの小さな会は皆様の御協力によつて活動が続いているのです。

御聖堂の寄附、愛の箱、又寄附会員の方々の御協力には心から感謝いたします。

前号「双塔」クリスマス号に御報告いたしました以降の御協力を次に掲げ、重ねて感謝の意を表します。

寄附箱	男子入口	五八六円
	女子入口	三八九四円
寄附会員寄附		四一八〇円
クリスマス特別寄附		一一九二円
伊勢湾台風義援金		三一五九円
愛の箱（衣料・日用品）		九〇点

（十二月中旬から三月まで）

男子青年会の活動

（本会について更によくお知りになりたい方は、会員又は教会事務室へ御連絡下さい）

男子青年会は総数五十六名（昭和三十四年十二月現在の名簿による）であるが、会員の中には既婚者もあれば、独身者もあり、年令、職業等みな違つていて、学生会のように職業、年令などの似かよつたグループに較べると、いろ／＼な面でもずかしいグループである。そのために、一部には、男子青年の活動が消極的であるというような御批判もあると聞いているが、われわれ男子青年会員自身、何とかしてよりよい、より活潑な活動をしたいものと念願しているので、建設的な御意見があつたら、お教え願いたい。

以下編集の御要望により、男子青年会の活動の一端を紹介したいと思う。

男子青年会の活動は、大別して通常の活動と、特殊な活動とに分けることができる。

通常の活動とは、主任神父様の司牧上の機関として、

他のグループと同じように、毎月定期的にしている活動であり、特殊な活動とは、男子青年会のみが行っている活動である。

一、通常の活動

イ、例会

他のグループと同様、男子青年会も毎月第一日曜日の夜、例会が開かれる。大体七時半から九時半の二時間ほどであるが、時には十時頃までかかることも稀ではない。

まず、典礼の勉強、神父様のお話をうかがいながら、カトリック典礼の諸様式と、その精神とを理解する。この勉強は待客を奉仕する際に有益である。

次に、会員が毎月交替で、社会問題の研究発表を行い、神父様の御指導の下に全員でこれを討議する。左右入り組れて複雑な社会にあつて、カトリック者として正しい道を歩むためには、社会問題に關する教会の教えをよく理解しておく必要がある。幸いにして主任神父様は、この問題に非常に御熱心で、教区報や、青年会報などに、しばしば執筆されておられるので、男子青年の例会でも通

切な御指導を仰けるのはありがたい。最後にいろいろな連絡事項、協議事項などを話し合つて終る。

ロ、聖堂掃除

毎月第一土曜日の夜は、聖堂掃除を奉仕する。男子青年の聖堂掃除は月一回だけで、あとは他のグループにお願しているのだ。この日は特に念を入れて掃除をする。ワックスを塗り、全身の力をこめてこれを床になすり込み、その上を更にもう一度仕上げの空ぶきをする。少人数でない聖堂を一通り終った時には汗だく、腕も足も痛くなる。それでも、よく光った床を見るのは又格別心よい疲れと共に帰途につくのである。

二、特殊な活動

イ、バタヤ

男子青年のみの特殊な活動としてまずオーにあげられるのはバタヤである。これまで年一回春の大掃除のシーズンをねらつて、信者さんの家庭を訪向し、廢品をいたゞいてきたのであるが、今年からは、この他に、申込の都度出勤する常設バタヤが設置されることになった。もつとも、このバタヤ、自動車を乗りつけて廢品を回収するというな

か、デラックスなバタヤで「職の町のマリマ」に見せたら、夢の国のバタヤと思うかも知れない。

ロ、会場準備

クリスマス劇や、御復活のバザー、その他事あるごとに会場の準備を仰せつかるのが男子青年の重要な活動の一つとなつてゐる。一日の勤務を終えて、疲れた体で更にもう一度重い舞台を運び出したり、机を並べたりするのは、仲々大変だが、まがりなりにも、会場の準備は男子青年が引き受けてきた。又今後も同様であろう。なるべく多数の方々の御協力を切にお願いする。

ハ、会報の発行

毎月第一日曜日には青年会報が発行されている。これは女子青年との共同発行であるが、もう教区間、一度の休刊もなく続けている。先輩諸兄姉の努力に敬意を表したい。最近この会報の存在価値が認められて、たゞ青年会員のためだけでなく、広く信者一般のためにも利用されるようになったのは喜ばしい。今後とも皆様の御支援をお願いする。

こうして男子青年の活動を列挙してみると、ささやかな

ながら、各方面にわたつてゐるのに驚く。今後は、あ

れむこれむと手を広げることよりも、現在行つてゐる活動を少しでも充実する方向に努力したいものである。男子青年会がさまざまな慈善事業の最の中にゆるがす立つ樫の木のような存在を保ち続けるために努力を続けたいと思う。

女子青年の活動

記

去年のバザーの会場をにぎわした手芸品、実用品の製作には、その殆どが女子青年の手にかつたものだといつても、云いすぎではないでしょう。今年も御復活のバザーを目前に控えて、忙しい時間をさいての製作に全員余念がない事と思ひます。

実際、どの取場でもその活動の中心となつてゐるのは青年部らしいのです。ッ字、から云えば青ニオの部類で、まだ口はしの黄色いくせに、かも知れませんがあふれるばかりのエネルギーを使つての活動は、たしかに一番使い価値のあるものかも知れません。

さて、当教会の女子青年は、青年会の重要メンバー

でもあります。いつも、「杉の木と男の子は育たない」といわれる新潟の男子の後をたたいっている位ですから、大勢の教に物を云わせて、あちこちとまめに動いています。

今までやって来た仕事は、次の通りです。

- 一、バザーに出品する物の製作
- 二、会報の編集、印刷（男子と合同で）
- 三、日曜日のパン売（利益金は貯金してバザーに必要なものを購入）

主な仕事は以上ですが、仕事などはかりしている機械の機なものばかりでなく、毎月第三日曜に開かれる例会には、教理研究、カトリック新聞にのせてある教皇様の御言葉の研究、実際に自分達のつき当っている事などについての話し合いなど、出席も近頃ますます多くなっています。

けれども、一つ気がかりになつてゐる点があります。これは男子青年にも当てはまる事だと思ひますが、未だ将来の方針がはっきりしていない人が多いので、自分達の将来は如何にして信仰生活をして行くか、或は女子青年だつたら、なおの事、信仰生活を全う出来る人と結婚出来るか、この事のために考えがぐらつて

種々の活動の妨げとなつてゐる事です。けれどもこういつた向題こそ、例会などで話し合つたらどうなのか、女子青年会ばかりでなく、男子青年にもあたえられた一つの大きな課題ではないでしょうか。

こどものページ

しょうぼうえんしゅう

だれかがよんだ、でてみたら
しょうぼうたいが、みずじゃあじやあ、
しょうぼうしやほうなりをたてる、
むこうへいくと、はしごしやが
はしごをはして水をはじく、
にいがたに一だいいかないはしごしやは
びかひかひかつてきれいだなあ、
えんしゅうおわつたしょうぼうたいは
はあはあしながら、ほうすをたたむよ、
しょうぼうたいはいさましいなあ。

附記

御想像下さい！

土曜学校の時間中、信者ホールで、窓ごしに消防演習がまるみえです。

先生「皆さん、消防の演習はつきり見ていないで、こちらの黒板の方をむいて！」

生徒「先生だつて、横目でみているんだもの！」

春とごりっかつ



卒業式も終り、もうまじにせまるごりっかつ。

ごりっかつには、いろいろの、もよおしがあつて、中でも妹や弟は、たまごかしをめあてに、しているのです。

私は、バザーが、とつてもたのしみ。

それにしても、もう春だというのに、寒いし、みぞれ

むふる。

勉強をしていたら、まどをたたいてゐるあられの黒いかげが、虫のようになつてとんでゐる。
わたしのお友だちは、みんなおせつきようがだいさらいです。

だけど、ごりっかつ案におせつきようが、ないなんてへんですね。

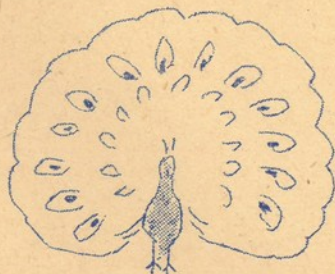
早く、あたたくなつて、そしてごりっかつ。

わたくしたちは、ごりっかつをたのしみにしています。

x

x

x



編集後記

走いさらばえたようなあの枯枝から、緑の芽がのぞいています。歩みのおそい春の訪れが、待ちに待たれたように、御復活祭の朝があげました。皆様、おめでとうございます。

この度は、各グループ便りを集めました。どうぞ、御自分の属してられないグループの記事にもよく眼をお通し下さい。

そして、復活の栄光にあずかる神秘体の一々一人として、横のつながりも一層緊密に持ち度いものと念願してやみません。

双塔 第二十八号

一九六〇年四月十六日発行

野田教区長認可

発行 新潟カトリック教会